

繪本豊臣勲功記

初編
壹

2209
1



陽 遠 13 48
2209
卷 /

櫻澤堂山編輯
一勇齋國芳畫

八甲必閑

繪本豐臣勲功記

初編

浪華書肆
群玉堂
文海堂

叙 

凡事自意外而來。為之謂天授。自意中
而出。為之謂人為。人為則可以人力爭之。至
天授則水火不能溺之。鋒鏑不能傷之。
勇力智謀之將。與之一對壘。其所施用
皆出我意外。辟易挫衄。不知榮之所出
焉。方天心之間。上綱解紐。羣雄割據。各
相吞噬。時則有若織田右府。以英邁不

豐臣紀初編序

羣之資。起濃尾之間。扼海道之咽喉。謀士若雲。猛將如雨。駭乎日致強大。謂天下必定斯人。是豈非人之意中之所出乎。豐公起人奴。撥亂反正。混一四海。其所施用。盡出人之意外。况其當時。擊茅鞋以追隨馬前者。未幾進退將士。指揮羣牧。紫綬金章。躬為天子補相。以極人臣之位。其餘烈殘勳。震爆朝鮮。朱

明之外者。安知豐公非意外之幸乎。先是。有小說家。敷衍其義。以行坊間者。然文之與畫。頗乏精彩。使觀者有靴痒之慨。頃日有書賈甘泉堂。債友人德水子。更鮮明其文。錦繡其畫。省繁除冗。以謀梓行。德水偉其得益。于童蒙。拮据經旬。每套十卷。加以繡像。使予一言。乃披閱之。豐公畢生偉勳。豐功躍然。

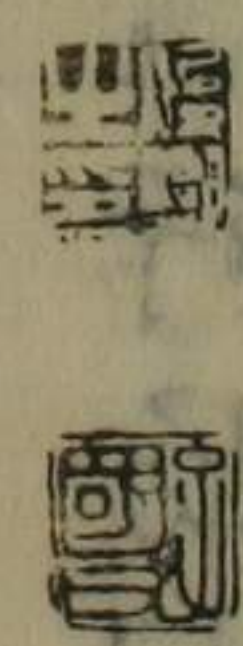
如見。殆有躬親探甲冑。與群雜周旋乎。戎馬河之想也。是亦不吾輩之意。外之一快事乎哉。

安政二年乙卯蒲月

藤純撰



雪城居士俊卿書



豆駿遠二
四國領主
今川治部大輔
源義元朝臣之像



源義元朝臣之像



織田新臣
木下藤吉郎高吉



尾張國守護職
織田上總介平信長之像



北島 孺子

左少將 具房卿之像



伊勢國司

北島大納言 具教卿之像



稻葉山城主
齋藤山城守利政入道
道三之像

繪本豊臣勲功記初編卷之一

目錄

昌盛法師祈竹生島天女

附還俗僧流

中村孫助昌吉仕織田家

附娶持菽女

日若丸誕生於仲觀奇瑞

附 神童生長

日若丸去鄉挺身降須賀

附 悍智奪刀

日若丸一遍還故鄉中村

附 求食老母



繪本豊臣勲功記初編卷之一

江戸 八功社 徳水剛補

明治四十五年五月廿日寄
本校出版部贈



昌盛法師祈竹生島天女 屬還俗儲胤
四海の大用文武過るへ形。古今の智勇豊太閤不超るへあじ
元も應仁の發乱より。元龜天正の朝中を干戈に豊らぬ日へたらしむ
綿とて續とて修羅の苦刹小沈も豊臣関白秀吉公主と
田間茅舎小沈とて逆は扶桑の六十餘州東陸西海五畿七道四十
餘年を破均らげ。蕪葉復莖の草樹を。脱け割て外明を成風
と震ふ神業大度不思後も亦未曾有の大將軍と謂つべし其濫觴
と精しく這小脱發きた時代ハ文明は屬する首敬山西塔學林院
昌盛法師といふ僧あり 木下系圖小佐々木氏恭木下の郷に住を依て木下源四郎といふ
氏恭の弟小僧あり東塔學林房不佳と注此僧をて昌盛の

昌盛法師の傳記

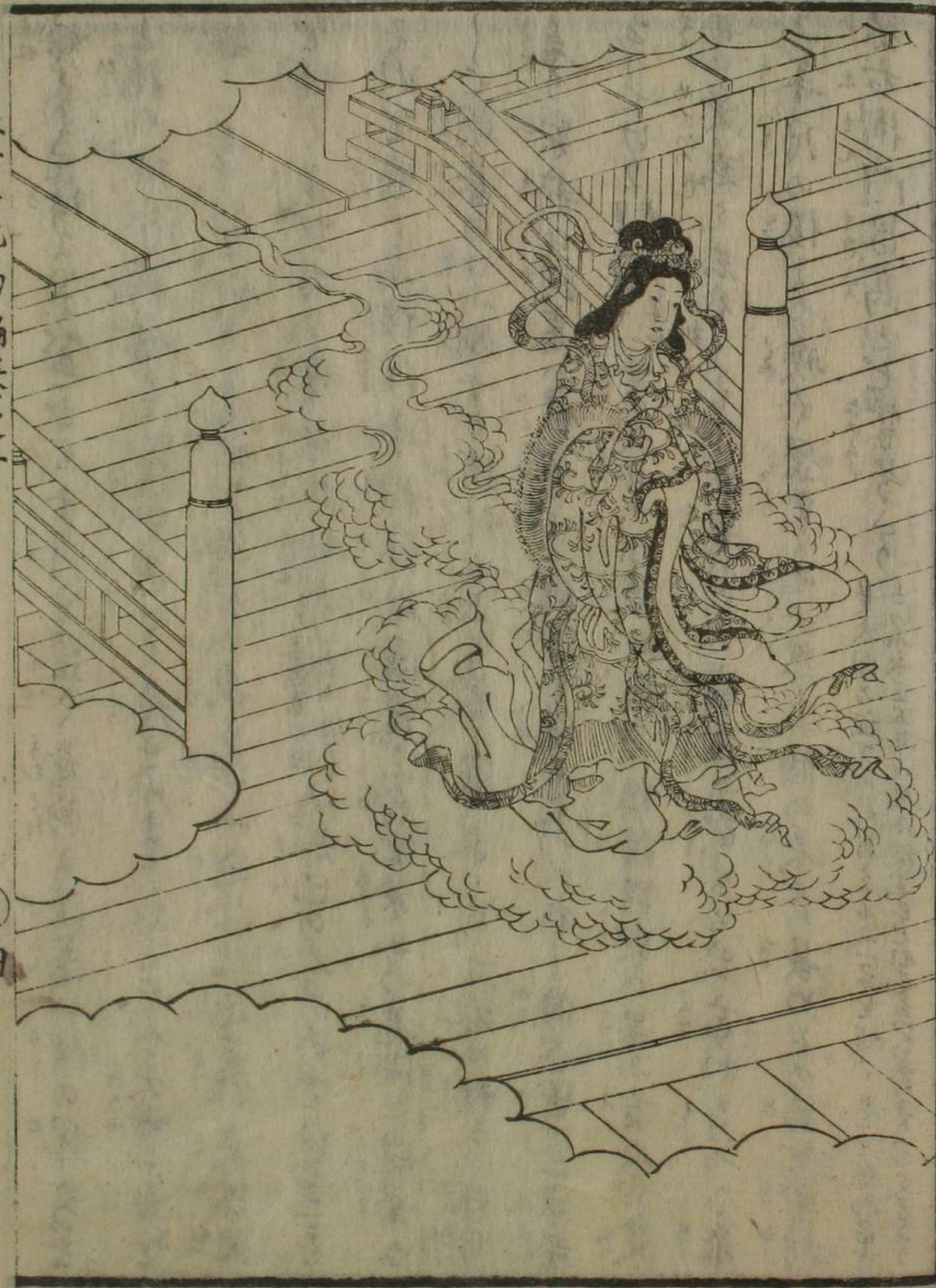
家へ江別渡井郡長野村へ入る。父の百姓長助なる者。這が二男
 ふまきとてし。を八家ありて登山あり。剃髪受戒。法の号を昌盛と稱
 つるが。學門深く顯密の法海小探入る。事理一心の妙義を曉し
 智火せり。煩惱を燒盡さんとす。臨々昌盛新ふ大願を起し
 一宗を興立せんと。愚義の分別立さければ。先哲の例も憑て神明佛院を
 祈る。不如と直ふ比叡を走下り。當國竹生嶋へ系指し。微妙天女小
 祈誓を深ふ。日と懈る。むあく百日が際。歩行を運び。か不亂念す
 きども雲之鏡。掌てあさる。け色。バ。こ。成公の法。きふこと。一遭發願しつる
 う。ハ。念せり。て天女小歸し。死すとも。所念を達せ。罷へき。よ。や。百日も。今
 宵を限り。と至ふ。念と。通夜ありける。曉近く。ある。候。不夢の現。騰。籠
 と。珠の扉の。文字。不。開。き。香雲。純。結。する。隙。は。燃。嚴。微妙の。神女。現。を

河声涼しく。若くも。つ。汝。今。大願を起し。一宗を興立せんと。庶幾し。雖も
 世間名利の法。あり。妙覺。内。證。の。願。海。不。稱。を。徒。は。勝。劣。を。争。ふ。の。と。
 衆生。法。度。の。法。不。わ。び。今。世。四。海。惱。亂。一。万。乘。の。皇。より。億。兆。の。民。不。至。る。ま。ふ。
 會く。嗟。嗟。の。苦。小。端。毎。明。長。夜。の。園。不。育。居。も。然。れ。ども。誰。か。此。苦。を。救。えん
 ざる。輩。は。今。は。も。あれ。四。海。を。統。つ。一。個。の。大。將。顯。出。上。の。帝。王。の。御。為。下。の
 万。民。の。ため。慈。愍。の。志。を。勵。し。只。願。は。天。助。の。力。を。震。ひ。世。上。の。亂。を。鎮。め
 ろ。は。是。を。善。薩。六。度。の。行。不。勝。を。一。宗。を。興。立。せ。と。然。宗。と。勝。劣。を。争
 る。ふ。と。其。功。り。を。ま。う。巨。大。なる。實。ふ。大。悲。の。願。を。不。稱。ひ。十。地。の。内。地。に
 満。望。す。一。孰。汝。が。前。因。を。考。つ。不。出家。得。道。する。の。り。何。の。つ。亦。子。孫。は
 一人。の。大。將。軍。を。得。つ。所。の。果。報。あり。今。より。子。孫。を。起。す。の。術。を。設。け
 四。海。一。統。せ。し。る。ま。き。士。を。求。め。ん。り。と。行。願。し。至。信。奉。行。する。時。ハ。大。願。四

満一一個の奇男児を生せしめ普文の下と流るる五十年をい出登
 うらぶ努々疑むる怠らざるべし必しも法とめよやと听く懐一ハ
 鳥が音小夢覚さるる宮殿の曙光群生竹の玉蔓らう岸うつ波
 の令を推く信を茲にいやまされて昌盛奇異のおもひせねし
 吁あやぐさや天女の示現を念釈の成就する繹子孫ふありとの
 神告いまもく我は帰俗せよとのことあらざらん先還俗の準備を
 せんと同國荒神山は踏登り断食ありて靈符を待て終宅の
 法を修すること二十七日這もも天童の灵夢を蒙り雀踊するま
 心を歡喜し然るに還俗せんりのこと俄に狂人の模様をねし
 学林院と遁出りて故郷長野村にたち返り兄長左衛門が家よ
 食客素よと実の狂人あはねば思を後白と越する俣ふ意明らく

豊田
 女子の
 十五才
 をいふ

愈ふれども比叡は帰らん氣色も見えず法まぐる数珠の紐の
 梢も火宅の煙は薰染く後がらるる法の線脱く疊る戒袍小
 積る五欲の塵埃昨天此秋の刺栗も今天春立て風ささるる
 吐蘇柳は梳り羽立天くる夏の園縁に紅糸交るあらは鬢ふか
 翠の鬢髪褐布の袖の短くも長野の里小讚さるる艶漢乃
 模様を何日墻間窺し母方の叔父孫五右衛門が女の阿高一昨
 年跨電の胖変て二十ふい三足ねども剩る夜半の寢衣濡るん
 のと磯馴る色を厥子の親とて子を見る徳の速ければ快悟
 ろくや欽こび昌盛るる迎子おせん時節もがると僕そのうち
 遠よそれと誘ふ水漸き又起て累夜ふ結ぶる花も実を果て月の
 さつりれ滞りしことを亂の胎内小妊娠され天女の示現もあるるま



昌盛法師竹生
島の神壇に念彼
天女の靈話
業の圖



嬉しき緯のなほ色ども。十月を盈る産胸は墮落の僧の児よるど
 と他の祿らん朽憾さよ遠里ありて産すんより。ひとまづ夫婦が身を
 躲し憑人を討て産地を得んと夜の間に近江を退走つ美濃路
 を過ぐ尾羽る。愛智郡中村一里近し。知巳の人れあるとけきむ。
 それを憑る小移住。中村弥助國吉と名を革めつ遠郷に遊筆な
 して朝暮の口小糊する活計も玉を養ふ情子一の左右の程月
 あり家荊の河高の最安と冊湖の珠もつねに儂き男子を平産
 あてけり。是文明十二
庚子の年也蓋天女の示現小應り。鎮護國家の器不有ぬと又
 母の愛慈を頃刻も下小安バとを寢食の欲もあら忘れ育つる采
 小年月の授より疾く歴更りて天然一個の人と長ぬその名を中村
 孫右衛門昌高とて字号する
是太閤の祖父ありて昌高も又一子を授く是を孫助昌吉
 とし小永正五年戊辰小能登まじとれせむち秀吉公の父君あり

弥助この
 始より中
 村の名
 のゆつ
 長野とも
 中村の苗
 字入年を
 経てまじ
 うりのあ

中村弥助昌吉仕織田家附娶持款女

時聖くされば雪を産せ地土うぐされば獲出を茲に中村國吉夫
 婦丹波して男子と育ふといふも時機いづと熟せざるや
 孫右衛門昌高を事ありて尾洲中村小身を終れども父國吉が
 本意を守りよく一子の孫助昌吉に教訓せしむ昌吉ありに
 父祖が青志を連継る文武の道を策勵あり。別く鎧劍の伎は
 熟しつ。よく厥妙を繼得せり。這事ハ稍閑きつ。その頃尾羽の領
 主といへ斯波治部大輔義統あり。春日井部清海の滅は在
 任して是が宰冢に織田備後守信秀といふ武勇勝也。良
 家あり。孫助昌吉思ひあやう倘隨後うさむ必す其志を遂げん
 と。備後守が居城する。古渡小走來り。奉公の義を願入りに決死

足程の阙ありく。姓を木下と革めつて隊卒を勤らう。
 昌吉が二十八才の時あり。昌吉軍に後ふごとの其身を風裡の毛結
 天支四年乙未のときあり。昌吉軍に後ふごとの其身を風裡の毛結
 一隊一伍を指揮する。大將品も做さんすと末のもしも懐され
 けり。頃へ天文九年の六月織田今川と牟播の機會あり。三洲
 大樹寺の戦ひ。昌吉先陣に馳向ひ敵兵二人鬻地を捕依せ
 首捨破くたち揚ると敵士つるよりそれ逃る敵を捉と三騎
 かうち連昌吉目けり。擲菟るを防げど身も稍疲まされ。心
 怯むところ。一個の敵弥助が太腿をうり。窮ふをわけり。突破
 らし。痛若く堪ふ。仰面を僵く。危かりしを自方大勢を危
 あり。故の兵士を趕送り。漸く援く引送く。信秀これを者察し

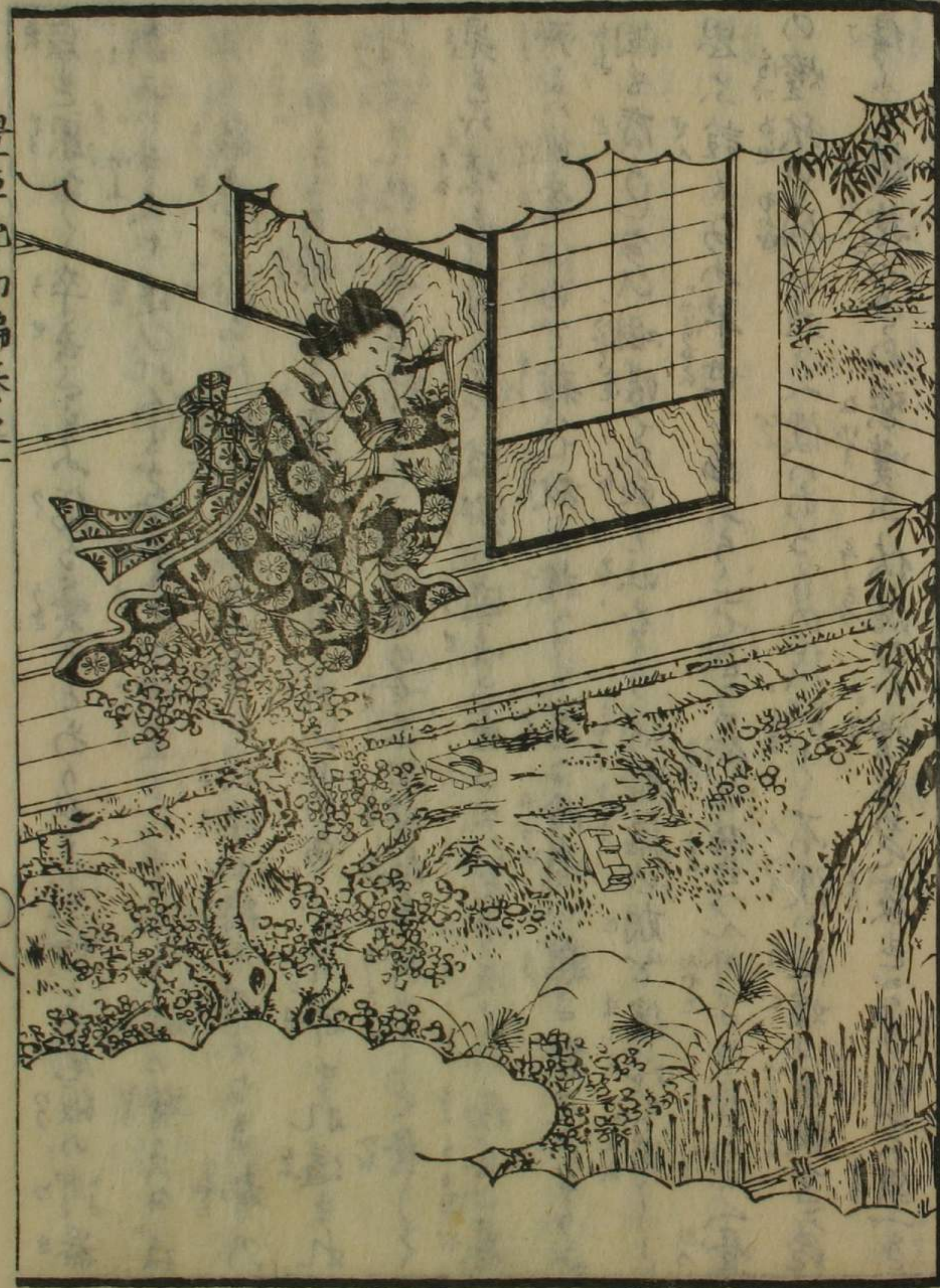
今日弥助が搦まき比較されを感賞し。一畝の竹流りの金あり。賜に
 派養生を成さる。然るに遠敵骨をか。思の外に深徹よく。
 金瘡ややく愈るといふも。右の脚に練體を固。屈伸素のことく
 不成り。歩は自由なる。さうければ。憚る。奉公と。いふ。武功
 と露とこと。匡一。念の残と。致仕あり。故郷中村に歸去。東座
 て。食せ。山も。鳩さん。傘も。張て。新水の。加扶。ふ。さんと。骨作り。轉。轉。纏
 飾と。信ら。も。咱身。懐ふ。千。摩。竹。皮。より。別。き。巻。紙。に。世。帯。の。洗。や。藪。糊
 汗と。混。一。煎。油。を。刷。く。擔。頭。の。日。小。曝。も。さ。ら。の。天。晴。天。下。さ。す。り。に。豊。臣
 関白が父の業とを。知。れ。け。る。後。は。存。び。新。井。十。三。郎。の。這。木。下。弥。助。昌。吉。が
 家。荆。の。姓。條。を。鞠。り。下。中。村。能。治。五。郎。助。が。姪。の。り。の。
 其。い。を。於。仲。と。呼。ぶ。が。心。軟。和。賢。く。そ。刀。尺。徑。緯。扶。杖。を。他。に。勝。も。て

能く做しよとも。容貌の醜けまぶ。娶迎ふりゆき。鬼女も能く。二六の春中。色香も。叔父五郎助。過しう。呼喚あや。於仲の天が。去ぬる明應三年。後土御門の御宇。五月の緯。難題を内裏より賜り。保彦卿とてあへむ。

月夜の本れ有く。と添せられ。軟く。奏聞せし。逆鱗。痛す。保彦卿尾刈村雲の里。配流せらる。儲持。從者。伴られ。下られ。侍。傳め。狩衣塵。泥む。糞す。

と下保彦の村雲の里の里の松

ながめたる。村雲此か。と吟と。御意根。厨まを。器所。宿世の縁。さどと情を。障遮。這女子。御器所。とめ入。臥す。豊臣記 編卷之二



御器所の
處女
春情と
濃や
納言
保廣卿の
秋心を
慰補
せむ



哀は果あつて卒去すまふ恚る憂ことありぞとも。知くは尾張の清器
所あり。今天や違ひれ人も多。聖天や便宜もつるあんと。喟の聲よはね
ども。愁患を紛らひて幼女を慈しむる小月超て待甲斐もなき都乃
考耗なき怖らへ僕情の妻らむありのあらん。邪中れ遠きれ
付後く。おの安吾訪むやと。二歳の女子を昇抱き。脚辛くと登りて
見まは。嗟あどきあに彼卿の逝去させさむひて。今天とや初忌日墓
所よ。桃李紅白と雜て故と捨もあ。冷者の艱さ難さ。あやうふ
泪もなうしむ。咽堪え血を吐ちり。偶歸洛の期を後帰て。嬉しと
思ふ。詮もあ。早世しむらうて。さよ何は時へん。母子け身のう。昼
の燈秋の扇。それさ便いありの。或別く不便。這娘が果報つこる
律ふと樓抱。つるぬ悲嘆ふ伏枕む。理せめて哀さうり。初と果一き

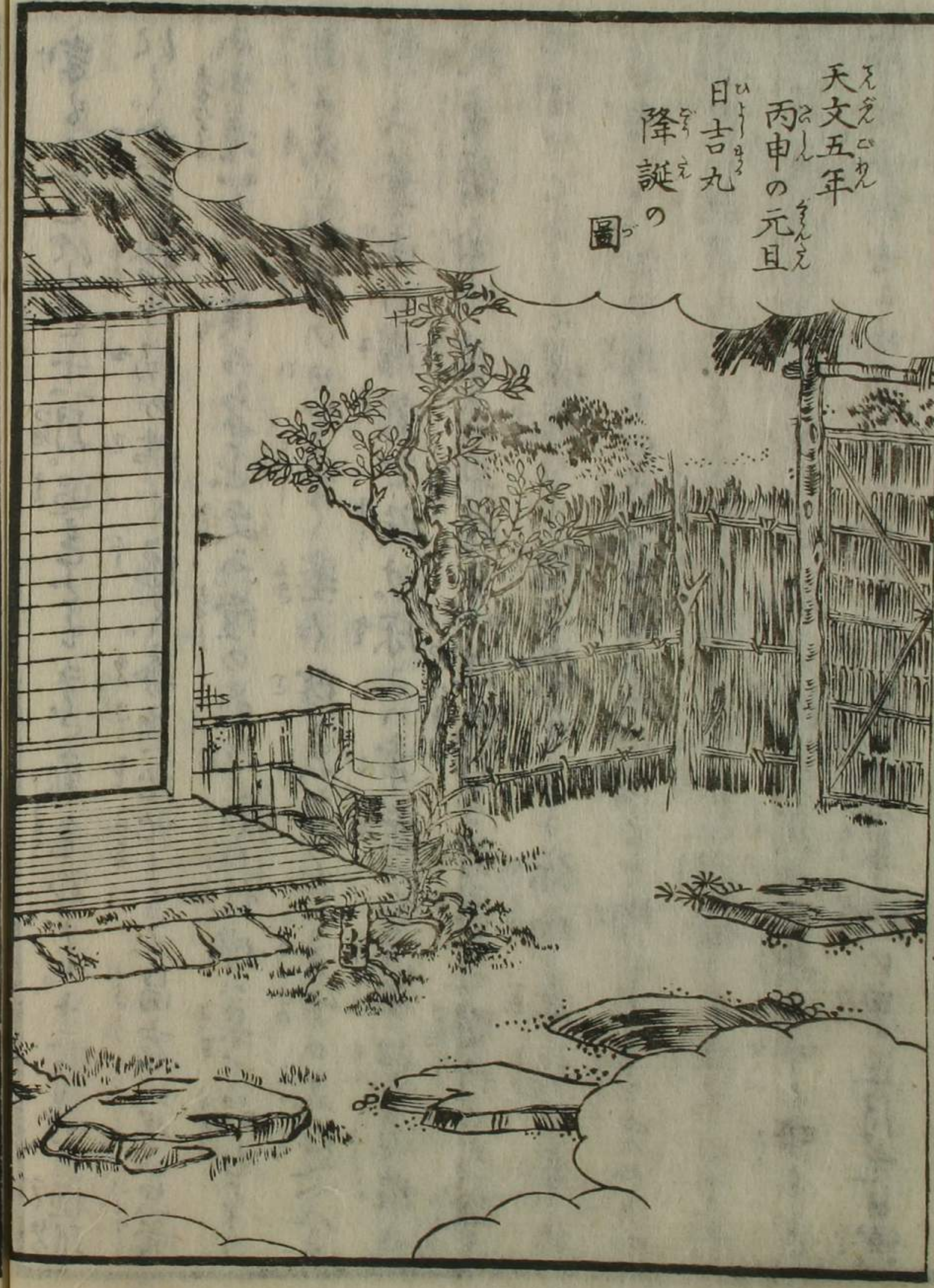
憂あらねば。漸くは。所ふ帰りぬれども。女の胸のよきうて。此哀後中病
とあり。程さ疾まを。黄泉の街の鬼とあり。果を。父の次を。史洞と共ふる。或
摺み。是ぞ葵り。孫の養監ふと乳し。一あ年を過せり。世の理の空
者必滅。老病命を債り。来て。次を。夫も亦耳順の秋。茶毘の烟。終を取
幼稚の女子が。憑きもあ。たを。叔父五郎助が。憐まむ。ひ。名を。於仲と。称る
し。喟。喟。房ふ。乎。安つる。を。媒物。結する。人ありて。於仲女十八。衆の。夏
代末。木下弥助が。妻と。く。し。けり。是。享禄四年。四月の。こと。あり。と。と。と。
日吉丸。誕生。於仲。觀音。瑞。附。神童。生長。
陰陽和し。あ。ふ。し。て。娘。小。雨。澤。降。り。夫婦。和。し。て。あ。ふ。し。て。辰。は。家
道。成。り。と。木下。弥助。昌吉。は。於仲。の。方。を。娶。て。し。り。好。合。こ。と。慘。膠。の。如。く
比目。鷺。鷺。も。か。の。む。さ。り。し。が。其。驗。も。あ。ま。ち。見。え。妊。娠。形。の。如。く。ふ。し。し。く。

豊後言部

是より安産ありぬるハ、憑む甲斐な女子あり此女子ハ後ハ長尾武藏守ノ妻トシテ丹後少将秀俊ノ母ナリ
 天文三年 昌吉更ニ森比を、咳益もあき出産する。父祖の遺言もあるのぞ
 懐胎を落ししとむもいままうげは見えける由急妻も宛面目も不幸
 希男子を婉めんと。這村は鎮座ましくける。日吉権現へ極願し
 藁砧又知らせ日糸く信心懈怠まじり。於仲の方が或夜の夢に
 日輪花で懐入ふとて、かその明天より。身の平生あぬやう不覚え
 昨天小妻の食擇ま正しく祈念の強あつて日吉の神に雄兒を授
 けふふ疑ひあし。と夫昌吉小譚ま。弥助の听くうち歡び父祖の
 遺言のあつとこそ。這遭孕胎一子ふあれ呼娘しやと佐儼一存りの
 いそいで禍災を防ぎ。食の切目を正し。席のいがある筈居らば
 心を丹誠と臨月を十月とこそ算られ。然ども不思議や出産の

身もええべしと十一月。過まともまど氣色ぬし。十二月回ハ極月
 にく。世間の恰も湯の沸く像く。奇き殆忙し。昌吉夫婦ハ只管
 小出産との後ららせど。更不燈のあつれば。佐儼ハ呆て怪むなり。
 新又未くる春の日と閑く。塞ぐ待まらぬ。若方の年達へんと
 軒へ葦索の備飾を設け。床への幸菜つむ五幸盤。道祖の
 柳を齋。全ト巷さへ見情く。洗清むる所思にて。爆竹の火ハ除々
 の。園をたらし。と晷賑り。恁る機会く。弥助と妻。頻に産の
 音をづき。肚の痛との尋常なぬ。備こそ得らうと昌吉が母の
 氣を吐度も忘る。内叔外族を召集し。準備して待らどこと
 あま一厥朝。婉と老婆が告。疹と流る。周血と共。呷く。暗く。と
 位初声の世は听達し。方は是天文五年丙の申正月元日寅

天文五年
丙申の元旦
日吉丸
降誕の
圖



の一點扶椽の天地再開の聲音を這ふ叫初の祝足かりける歳旦

あり按ずる小豊鑑并小豊臣譜其天文六年丁酉誕生とあり日吉丸ヲ猿子若小一の美指わ

て以兒遠小誕生一夜より弥助が家の棟天小為りて彗星小像示し

美星爛々として出現る外面へ恰も白昼の如し。日吉丸生長の後戦場小

以皇太閤が陣上不現るるを察する時ハ忽軍力を以てかゝるるを勝利を得たを

眼ハ宛猿の如く他小向つを光あつく。脱くるること射るが像し塔てや

瞳二あり左右の頬の尖あ五の黒痣顔を以て九夫とハ見えざるけり

父母のよほびひのめも鈍けり。以兒を獲るるム叙。日吉の神へこれを

祈り。わり日禱の瑞夢を得たれば幼名もあれども擇べとて日吉丸と

と決号すり。然ども此兒がその相貌猿小似るを近隣の老お

とわく混名して日吉ハ呼ぶを衆口小猿之助と唱離ぬ後ハ父母

さらこれあて様よと心バ我号も意得點頭もらふど理もる已云七

案小長一以の形ハ年より微さけきども心性飽まて大あて隣家

の兒童と戯遊ぶ。嘗て他の下よ立たむを沙闌りを混挑す。角

舐石投物争。更に諭る緯をけま。満里拳と日吉を憎む顔も

性も実小猿あり。紗の緯もき見あぐも親をればこと愛がるよな

と驚笑ふを昌吉夫婦夙小それと所差つ。猿のこめれ棟書小登山き

せんと心づき母の於仲が従弟と源左衛門といふ人の清海明神坊

不住ぬるが遠を憑りて蓋津ある光明ちて小時宗の精舎へ意飾がら

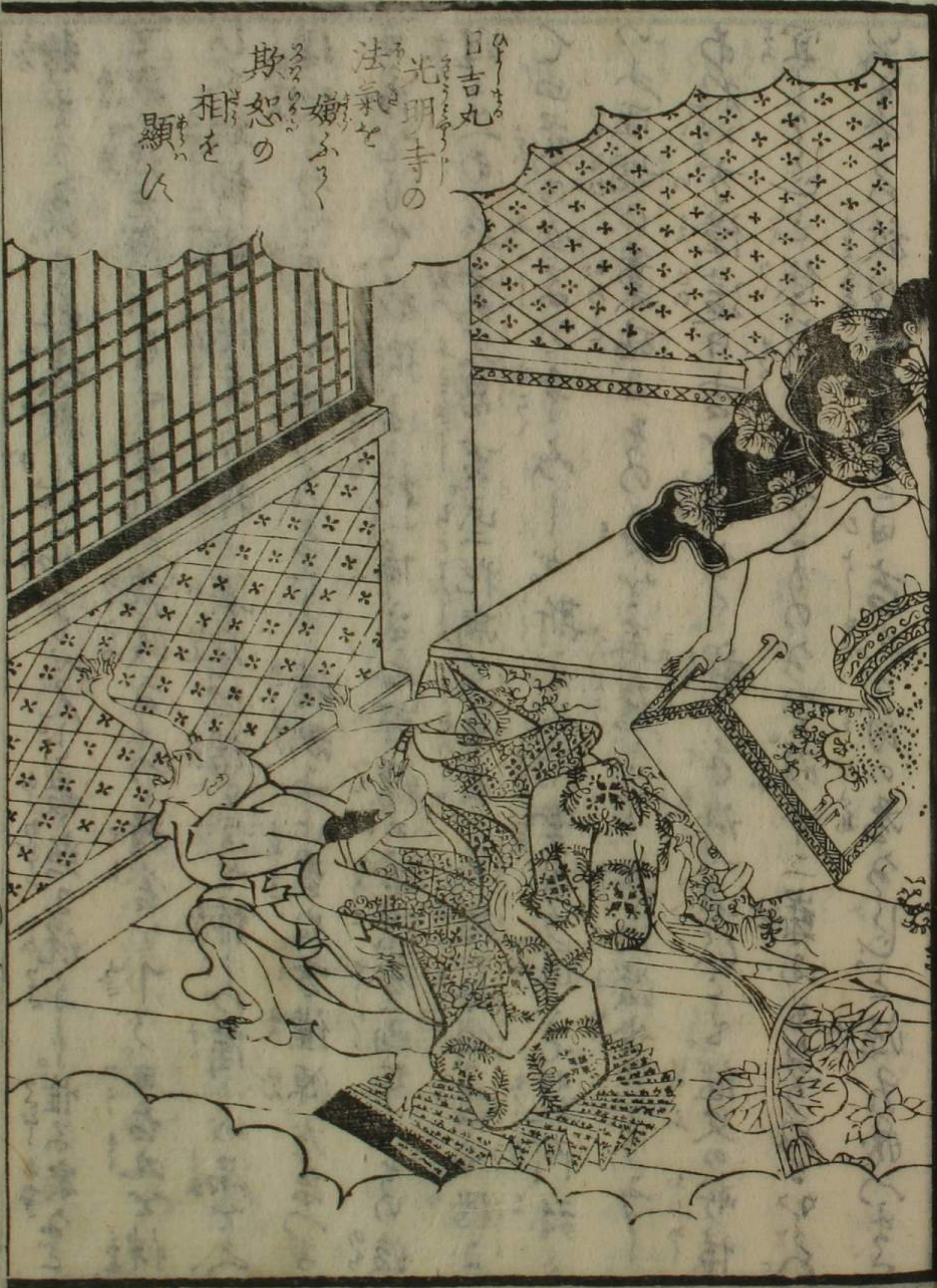
る以遺し。是日吉丸が八才の時あり按ずる小他を去すて光明寺の

師の上人。熟日吉が異相を観る。這見るるを得道とす。劉老のし

と賞嘆有て續書字笔教へぬれども日吉丸ハこれを嫌ひ曾く机子

倚る繻ろ。瞠る有ハ外面へ走奔。兎輩を集て竹木の應手ありしを
 振散し。合戦ありと唱起つ。つらも自身ハ大御堂。堆立ふ立騎駈の
 重誓ふ指揮あり。遠がらあふ寺中の僧徒。日吉丸を偽言り。志
 志く。所懲さるといとも。毎口賢く返答して。責利こと毎く
 あり。ム年ありて朝政著狂心の隨ニ動靜けり。是ハ十二歳の時あり
 とや。新法事の武ありとて。依物で奉堂へ還。が中央机の前は
 ち。十方不背の佛ニ對し。子ハ他の苦患を救。本於ありと
 所つるが。憚中を蹴踏つげき。疲きも。亂もあつらん。我齋未
 して。依餅を服せよ。傍々若來得させんと。大音聲のししと
 て。志志く。着護り居り。が。頓て洞の燭是槍把。あんぢ松院
 の牙せり。我依誓せ。受さるハ。歩怪ありといふ。來は。燭其玉振

揚撲他とうの。年最古き本像の何れありて持すべき。後光四方に
 散礼し。弥院の御首の合本の膠。難きを瓦落く碎り。這振著に
 法子。變みおごとの。ゆと。紐束り。這所為る。より。勢類なり。噫りとい
 形き。所見や。猿めが。大愛者。發し。より。い。い。做んと。衆口ハ。惶。相。法
 子。あれ。劇く。和尚。お。告。あり。上人。も。亦。孩。ま。の。弥。院。堂。上。ふ。走。り。來
 也。這。所。為。と。ん。を。稱。才。响。呆。て。靜。も。あり。より。が。や。う。や。黠。念。し。を。り
 つ。日。吉。丸。は。宣。ふ。や。う。奉。考。を。破。却。し。なる。そ。罪。勿。論。わ。ら。う。ら。ん。
 呵るに途あり。滅るに。出。を。絶。を。去。ふ。ら。う。唯。這。う。ん。の。う。せ。ん。快。親
 巷へ送り返さん。誘引の人を招けとて。明神街なる。源光弟の。是。を。よ。び
 よ。せ。日。吉。丸。が。院。所。作。陪。り。所。せ。這。見。奇。あり。生。あり。し。六。四。五。年。甚
 奇。せ。り。と。も。憚。て。ハ。勿。々。力。暨。を。以。一旦。ゆ。ま。う。に。な。り。未。來。と。る。も



日吉丸
光明寺の
法氣を
顯はす
其怒の
相を
顯はす

静まりろ。これ復教化を加へもせん。最悪は況ふ。惟子翁を
 て既一源光弟のふりてこれに落涙する。精舎を下り。日吉丸を伴
 ひて。明神衛一伴来り。種々異見を相させ怖る。簡一の品を之
 深切りて日吉を勞り。志を清洲に止置ぬ。方僅源左弟つが
 日吉をりて故郷中村へ歸さぬ。所謂の這鬼登山せし。その後
 程まゝあつて。實又昌吉は此に病て卒去しぬ。後母公が枝冷獨り
 て。四葉の女子を孕みしが。斯くの活業するに巴く。筑阿弥と
 つゝ亞姻の藁砧よその身は再婚あり。幸は後世のやうに
 あれば。方僅這日吉を懐く。親が行へ返ひとも。継父の所懐
 宜しくと。恁に計らひつるものあり。既十二歳ありぬるが。わ
 り手を久放狂ますべき日吉丸が。父の爲るに。と源左勝つまこ

肝煎して。這家よ那門と奉公不得仕れども。一句の勢はす
 返さず。緯二十八度。遠遭の利國主と見ゆ。勢めさせんと懐ふあり
 縁者ありける。番匠の勤を清といふ者あり。此を倚因と長
 牧の茶碗師が。許へ使し。日吉の形容醜けれども。利口發明
 衆に超え主人の心を快悟す。一月計は陶器の技を大匠が之
 たり。是も主も懇を待て。研疎まら。召使ふ。然とも大器の
 日吉丸。既這處も厭却す。次骨は狂放し。遊びに嗜す。
 家内は在らば。亭主も案を想遠く。教諭し。つまど耳
 あり。停めば。慢は道遠し。けま。持刺し。法。三歳ある。鬼の
 肴獲を。做ら。この這の發興し。と一。日。負つ。抱へ。弛ゆる。に。
 それ。厭て。嗜右流左流。思。怒る。緯。を。あれ。と。背。朋。ある。

井戸のりといゆま。草りて入る索掛柄を彼幼児を井掛
結忍稚子よ稚子よ辛抱やね頭て解えて得るせんこ
し言葉遠を私奔る東を指して趣きりり

日右九去郷據身峰須賀属 悍智奪刀

鶴鶴いりて雀栖又接らん哉。然バ神を日吉九八速も長牧の
陶工店を私奔る。私を當て走るやどに其日の全く暮るころ
古河小未りけるが生来曲邪をけま一紙一紙も私せぬ今日他
お入れば一碗の飯隻豆の鞋孰も向ふて乞付むき。惜てや今宵の
接宿を六のりてや流凌ぐんと東者西見つ古河より津橋の
方一ゆえんと。茲小海東郡峰須賀村に郷士あり。名を小六正勝
と号て。義勇小志をとり鉄石の如く。峰須賀一村三十石の民小

まといて。赤馬のりといふといども。嘗て臨套の形状多く疎夜
廉合して身を深葉あり。孤獨姫寨の者を憐も。妻人亡まれば
接帖るき族倫を苦い世の亂る影をよみ憂ひ天下の治らん
緯を思念し。英雄を哀むること教百人山郎野夫もこれ慕
ふ。此近郷に住りの武を好むこと有り然るに中村の日
吉丸早くも小六正勝が義勇あるとせせ傳へ。路を返して
峰須賀村に尋入。身を正勝に投し。小六原素友と交るの
深秘を得る。英雄を捧ぶの誠あり。今日右九が相親を親しく
恐嘆すること淺く。現小女見を異相あり。凡下不屈する
事あり。と欵待こと懇切なり。夜と多。日と多。軍堂より
播を交る小後話最も賢く。正勝の造る所多し。或夜

智恵競し遊びたるが正勝おきていひたるやう。備世変り
 吾を北條さび汝が望む物を與へ意得どもも問答するに
 日吉丸様をゆくり小ち申すに感伏し。汝が欲しき物あは
 是と望めと所く日吉丸。吾長牧の陶家を出て武士ああら
 まく思ふといども。刀一口も持ざる代着。怯まされも一刀を
 賜へよと所望せしむ。正勝所くりりともあり。愛ぐる刀を給ん
 と首尾稍二三たりありける短刀を賜ふ。日吉様とおい
 だ。割てこれを試した。精毛廻りててんをければ再び小六が
 手に推換し。これハ鏡味鈍くある怖る吾望の刀を賜てよ
 といふ。正勝心悟る思ふ。初め誓し詞もあれが左右を賜り汝
 が望む刀のりぐは。熱むい望むが即腰に帯る刀こそそのぞみ

あれ。と所く正勝又も鞘は。是ハ子子村正の飛録し
 我家付室の刀なり 真書小青江村正とある一より村正の
家小青江の氏曾てなひまが蒸ふ書改む 汝が望む應
 報し。與るに最難し。餘の刀を望まれよと。惜せも果は
 日吉丸首を左おはし。夫人の詞とも愛をぬりのる最難約
 せし詞も。吾も勝るが何よ生れ歎き。汝稱へんと。官ふ
 吾のまご純る。約を愛むることを道るね。頼りうらじ
 と面勝する。汝正勝するに迷惑し。いやとよ刀を惜む
 わくば汝の事に於て。汝のそふ我を遣ふ。士遣軍か
 あぶくこれを所望といども。家書で賜ふること好し。然る汝
 今文汝は附ふ。其多く。後士の意を損ねん。是吾大なる病なり。
 然ふより初の如く。賜ぐるといひつるのあり。誠を欲るは佐々木

高綱が生倉の馬を得てごう。吾ふ初さび雨よじ我ゆを
 降人の恨もあく。吾指も遠いさうけり。那般せやと所く
 よりも。日吉丸大悦びいづれも是下の知ぬゆ。吾刀を取
 得べ。洞を遠き申しはるを。固く約して座を起ぬ。正勝
 吾初の日吉丸来る。と村正の刀を枕下置。熱腫したる
 態よりては。待ども日吉丸出来らば。其翌日も腕道く。刀を
 て約けるに。此足ごも所ことほ。正勝日吉丸を呼出し。いづれが
 約せし刀を取ること遠く。と信てつる。我日吉丸。種て取さき
 不熱中熱腸せし。まふかといふ。否これい違ふわど。猫の額
 ある魚と氣が観ふ。鬚繁う。膝と取さるは。わあらん。強
 といふも。遠き日吉丸大に。前く物笑ひ。氣よく取。猫よと

眠る。ゆづんを。志ごまふ。と。猫を退出り。高初甲を
 雨跡と傳く。戶外寂莫と。東海凄く。小ふ。今宵こそ
 日吉丸が来るらめ。来らば。手痛く打擲して。懲し。まん
 公を。今やと。待り。と。稍子の下刺と。覚し。き。後
 旗獨の下人あり。と。お。傘。雨の。高。者。備
 後面が。寝息を。寝ふ。と。息を。通。待。際
 夜の果くと。曉物。然とも。雨。正勝。い。志
 預り。様。何と。氣の。長。今。外。ふ。や。と。背。不。け
 刀を。刀架の。空。し。村正の。右。刀。見。之。は
 是。いつ。に。ち。日吉丸を。顔。日吉丸。これ。よ
 が。小。長。き。刀。を。前。出。来。り

豊田詩神綴巻之二

廿七



蜂須賀
日吉丸が
智謀を
探る



所望の刀をみ入る悦び限らばとの。正猶感下る面をみ
 いりおも早速方渺よりけり。我撥瀉の傘うの音ふか奪つれ
 刀の守りた論断ありた。賢くも取つるりの感するふ從餘り
 わり。今の既愉快附與とて。こ了得る智勇の正務も為せ
 冷徹して感佩る。熱く日吉の器量と慮ふふ年僅ふ十二
 にあり。那許務まき智略を役け。大丈夫とて驚感せしむ
 の不思後の奉止。是凡生の見あへあじと。未情りしむ
 一。愈親しく交情を明。且天文十八年日吉丸の他念
 あく。峰須賀の家と年を超て十四歳とて長よける。霞
 風雪霜二回り。居諾を以て後るといふも。遠もあぬ中村
 よて。母公の愛も知しめさず。日吉が緯のと瞬息もとては、

思ふく忘れねを。寧暖飽飢の時よつけ。妻見の奈何は
 つる春よめられど被くづき。夜は垢や泥つらん頼まれ指生
 色懶放りて。寐眠又悩とやせん。只それのそふ他は。又瘦る
 して患若や做つらん。乞馬見るとふ勾引やせん歎。那もれ
 這まれ素く。速く故郷へ帰きりし。嘆教見とや慕し。や
 と夫婦は孫を愛若の泪。年の南とて。持を嫁つて。為者
 那うのうた

日吉丸一遍還故郷中村 附 求食老婆
 靈泉の音小情ふく清冷。賢人の用ゆら信せし智現
 小日吉丸の長る就て。智慮悠々として痛が如し。既此事也
 天文十九年といふりけし。神意長て十六歳。執回の宮人

祇賽せん。蜂須賀正勝が家と侍出。宮小朝とあししが孰
 へ知らざる。脊より。唐呂よ唐よと唱りあり。唱と應つて。所ま
 匠風き一個の健命腰。鉄尺挿し。別人よりぬ。番匠首青木
 勘を誘うりけ。ま。逆小ひさ。た。対面を教合。て。側する。茶店の
 榻小企く。酷ひ。過超。天の始終。同の。細まの。中胸をり。纏ふ
 ろ。ち。の。勘を。捕も。預て。听つる。中村の。母が。朝暮。麻呂を。の。と。葉
 於ひ。在。侍と。源九。弟の。が。治る。み。所。一。旦。板。郷へ。帰れ。よ。と。う。ち
 同伴。て。踏。来。つ。源九。弟の。一。告。ける。に。同。ど。く。悦。び。日。吉。月。遠。く
 今。ま。で。暫。須。賀。正。勝。遊。して。正。勝。大。人。お。恵。ま。れ。る。由。を。告。げ。る。小
 源。九。弟。の。い。り。め。采。敵。を。蜂。須。賀。小。右。の。許。に。い。り。日。吉。が。遠。小。一。兩
 年。昔。言。せ。し。れ。恩。を。謝。し。且。へ。實。母。の。報。ひ。さ。り。と。暇。の。釋

と。と。け。る。に。こ。小。六。正。勝。諾。ひ。細。申。す。米。小。右。の。先。年。米。乃。の。杜。り
 伴。て。我。彼。又。止。安。く。る。の。を。原。主。後。と。い。ふ。り。あ。ら。は。し。却。て。我。と。を
 彼。兎。が。智。略。を。借。て。名。を。得。る。事。と。も。多。く。あ。り。ぬ。る。に。思。ふ
 を。い。を。五。分。分。り。あり。是。下。の。兎。が。親。屬。あり。必。を。互。く。討。ひ。あ。ら
 ぬ。日。吉。九。へ。凡。人。あり。せ。正。勝。あ。ら。は。凡。措。へ。も。既。足。ぶ。ま。と。あ。り。は。る
 是。下。の。兎。が。介。意。して。日。吉。が。陶。氣。ハ。遣。く。は。所。不。思。儀。多。小。人
 や。と。快。け。な。言。訳。し。けれ。ば。源。九。弟。の。ハ。愈。悦。び。睦。ま。り。て。蜂。須。賀。の。様。を
 左。右。あ。く。遣。去。つ。も。途。途。を。我。宅。に。還。ま。り。初。ま。は。ら。も。ま。と。未。合。せ。て
 我。今。天。日。吉。と。同。道。し。つ。中。村。に。伴。社。母。に。遠。せ。て。安。途。さ。せ。し。彼。亦。も
 継。し。き。内。合。と。い。再。醜。の。兎。も。あ。ら。侍。な。れ。ば。役。者。あ。ら。し。清。洲。へ
 置。く。陶。氣。し。と。た。び。福。と。強。て。の。侍。に。時。境。近。來。清。洲。の。城。の。番

清の管下り得られ同職の與方事のいふ者あり。渠よりて城
勇清の小枝小容をんと相憚る。日吉をりて棟梁の與方事
門の方遣し。海東郡三寺村小大工左門と云者あり。福岡市松正則の
實父なり。と云。爰ふいをもり。左出つての人あり。一度清海の

善清ハ果も火急のこころあり。生憎工匠を任より。子星の勤く去
ふふあふ。雇役を最中ゆゑ。日吉丸がまりし。與方事のいふは飲
食餌を贈り。役も充日く。三時不使つて。厭奉止と試つて。平生の

随氣不弱て易り。八九十人の食物を。刻限速つて。齋運ひ。湯水の
加減も大勢の氣に協す。拙きけ。與方事のいふも。更にあま

の匠倭推總て斯い珍り。き見曹より。増て形さ微き。目より
鼻へや。接つらんと。或はつ。懐き。ま。ま。た。曹。不。愛。勞。り。匠。殿。の

使役せり。兼て。勇清を奉り。する。部。主。眾。も。日。吉。を。見。思。ひ。様。よ

微とと喚合し。活し。ま。ど。て。在。け。る。が。爰。に。石。見。何。某。と。く。

假殿の内小帳を嘗。勇清の日記を書り。あり。日吉の素より
大肝なれ。人を人も思ひ。して。石見が。座。を。小。突。と。を。れ。備。へ。藤。の

筆法より。東。病。書。を。ま。し。件。り。ま。も。知。り。賜。る。の。に。や。と。爲。に
石見。莞。尔。と。笑。ひ。い。つ。み。も。阿。茶。が。謂。者。く。ゆ。る。大。名。の。少。男

の。筆。法。を。執。筆。と。稱。て。ま。く。の。扶。持。を。賜。る。ま。う。と。所。て。日。吉
ハ。層。々。同。や。り。而。其。所。扶。持。の。奈。量。を。ら。ん。の。り。も。我。ハ。百。石。所。築

銅と。是。其。日。吉。再。二。同。る。ハ。方。僅。遠。勇。清。小。園。大。工。倭。これ。ハ
賜。て。扶。持。米。ハ。那。計。出。し。玉。ふ。も。や。と。謂。よ。石。見。ハ。も。覺。を。鉄。ハ

勇。清。ハ。園。を。然。工。夫。大。匠。左。完。ハ。材。司。を。交。へ。二。百。人。餘。と。ま。り。し
た。ま。ハ。其。米。約。莫。二。石。ぞ。とい。ふ。日。吉。ハ。胸。裡。小。算。破。し。然。ら。ば。二。石。の

米を都合て年々七百廿石。又人の嘗て河知形より二百廿石。多
 多し。那計小御修行せされし貴書が五百石と云傳録あり。練筆
 みどの做ぬことあり。と嘗て鳴してと嘆あり。石見の満面小末を流
 ぎ。勃然と怒り起奉り。悪き小末が難言なる。武士を呼ぶ不當の
 奉止。自討のしめ小卒首刎ん。覺期をせよと刀の鞘握るを見る
 より日吉丸。鼻息嘆き。健ふ。走出をを猶憤り。奥左串のを呼ぶて
 是れ小條の猿めを奴。来よ然るに小終ての那方を。當人おせんと敷圍
 と。懸塚の職人。氣掃連の。口を破くと勃解收られ。漸めて石見
 何某。怒を控めて置奉り。當日も申時を報をふら。奥左串
 門の小槌あり。小槌の面拍鳴し。部下の諸匠引揚の。日吉丸をも
 伴ふ。自宅小還り。種く小。城内の律。習懼る。子孫て不難。做幾と

おと教訓せし。日吉丸。否。今日古学が賜を断し。心の淡
 戯。我彼一士と烈中をん。こめを懐ふ。異見さ。大工の扶持
 小既見。いと。溜しを思つ。那件。小刀を拍。舞し。取も。足
 らぬ。武子と。虚。嘯く。笑ふ。あり。奥左串の。も。已。然。し。恁。て。以。後
 不禁。密。あり。物。去。清。く。又。道。を。以。如。う。と。早。く。送。戻。し。けり。物
 去。清。も。亦。有。り。源。左。串。の。も。若。う。り。久。其。さ。入。方。僅。ハ。君
 事。獨。り。中。村。一。律。の。性。流。阿。弥。が。行。送。達。け。日。吉。が。事。も
 俺。們。が。許。不。遂。も。及。ぶ。と。断。言。い。て。退。去。し。流。阿。弥。の。不
 仔細。あり。異。見。も。狂。む。吐。り。も。せ。ぬ。せ。母。奶。福。を。惱。し。日。吉
 と。執。り。や。憑。倚。せ。ん。と。案。ず。る。う。ち。不。本。氣。の。若。令。ト。郵。を
 り。熊。右。活。針。叔。父。み。弟。弟。が。実。子。と。五。郎。作。の。い。は。壯。年。子。あり

母との後等 同跡うろが。渠と邊で辨治ありとも。羽田をたふと
 遣りしに。出入日許の風箱場まで。指搦のごとく搦けども日残
 ゆる。伊予の厩舎をせし。狂出しく家も杜らむ。飢乏の草を
 うろく支取の食ハ忽ちとて毒放まふ。五郎作が妻も不とく
 果き后日の鑑さ入進もせず。外面門にて款待をぬふ。日吉も食
 時は返らざりしが。這一條の端は附く。禪を添へ一説あり念ト
 中村小景歿しくその日と後。寡女のありけり。親の侍人
 地もろけき。邨の外田ある空地を借し。結着舎の葦壁。ふり起
 休又安るの。活業支もろけり。晩室の陶器しく計生
 とほいふ糊す。老婆なれば。日吉丸が生れ。胸も定て介抱は
 うりけん。見徳と。信交せしと。縁とありて。遠舎へ立寄り。空あ

あるに餐あわらば。施ふられよと。後訓う。老波女の日吉を憐て
 快着く肉へ。唱容。爐辺の圍坐し。安居らせし。土卵の渡りや
 撥暖め。年食小炊し。麦るれば。其中の外針冷もせし。延慮な
 せむ。小欲きや。と。喰べよと。外面利し。椀又去らう。杖盛のす
 志の松葉も百踏せり。懐古は。准臨候。飄母も。餐を求む
 も。這有様は。勢幣さう。日吉丸いらら。款び。呼味高き。塩梅よな
 芋さ。團の土筋と。燠も。益断る。思ひ。ぞ。做など。れ。お。進。後。打
 混る。鼓腹する。中を。喫し。と。り。喃阿姥。我程。あり。き。に。立。身。せ。ん。
 方。僅。施。與。ま。し。食。餌。の。報。一。粒。ど。り。て。万。倍。も。成。し。て。返。す。と。得
 さま。と。い。ふ。を。老。婆。の。禁。戒。と。否。と。よ。老。婆。の。足。下。が。報。謝。ま。ん
 と。懐。ふ。く。施。食。さ。せん。や。以。後。と。て。も。致。ま。の。言。他。人。不。か。ら。う。と。ぞ



日吉丸
 飢渴せ
 端なく
 扶妊婆が
 兼飯せ
 甘んじ



〇
あつた
あつた

37
甲

謂^いふ^まる^る。狂^{きやう}人^{にん}なりと^と憐^{れん}む^むと^と何^{なに}静^{じやう}み^み教^{きやう}也^やと^と日^ひ言^いは^はす^す。據^きて^て。單^{たん}整^{じやう}し。斯^す謂^い何^{なに}の^の所^{しよ}惡^{あく}く^く。以^い後^ごの^の言^いは^はす^す。謂^いま^ま。死^しぐ^ぐふ^ふ。余^あの^の悔^{くわい}ふ^ふ。及^{およ}言^いは^はす^す。つ^つる^る。の^のよ^よ。と^と微^い矣^や。法^{ぽう}。礼^{らい}舒^{しゆ}。後^ごけ^け。遠^{えん}舍^{しゃ}を^を立^たし^し。陽^{やう}の^の昏^{こん}る^る。天^{てん}み^み部^ぶ化^かが^が住^す居^いへ^へ。内^{ない}り^りて^て。休^{しゆ}ら^らと^と。斯^すふ^ふ。江^{かう}州^{しゆう}。大^{だい}上^{じやう}郡^{ぐん}。多^た賀^かの^の神^{しん}社^{しゃ}の^の供^{くわう}僧^{そう}る^る。觀^{くわん}音^{いん}院^{いん}。明^{めい}光^{かう}房^{ぼう}と^とい^いふ^ふ。乃^なり。關^{かん}東^{とう}の^の國^{こく}へ^へ祀^{まつ}れ^れ。せ^せん^んと^とて^て。遠^{えん}中^{ちゆう}村^{むら}に^に弟^{てい}づ^づる^る。駒^{こま}俱^ぐふ^ふ。伴^{ばん}と^とい^いふ^ふ。僕^{ぼく}が^が。時^{とき}疾^{しやく}は^は疾^{しやく}で^で。後^ごは^は違^{ちが}ひ^ひ。當^{たう}代^{だい}の^の奴^ぬ雇^こ。借^かと^と付^つく^く。よ^よと^とい^いふ^ふ。五^ご節^{せつ}作^{さく}。所^{しよ}着^{ちやく}。這^こ俱^ぐ。せん^んや^や。日^ひ書^{しよ}ま^ま。訊^{きん}ハ^ハ。一^{いつ}議^ぎふ^ふ。及^{およ}つ^つ。唯^{たひ}と^と。諾^{だく}ひ^ひ。その^の日^ひの中^{ちゆう}に^に。旒^{りう}。瑠^{りう}。房^{ぼう}。に^に。後^ご。せ^せ。ら^ら。れ^れ。東^{とう}國^{こく}。と^とを^を。り^り。な^なれ

繪本豊臣勲功記卷之一了

